

宗教には守り続けなければならないことがあります。国軸山こくじくさんという山号を持つ金峯山寺きんぷせんじは、1300年続いてきた修験道の法を曲げずに次の100年にそのまま伝えていく。この寺が踏ん張らないと日本が揺らく、蔵王権現ざおうこんげんが踏ん張っておられるから日本が踏ん張れる。そんな思いでここを守り続けたい。

金峯山寺第三十一世管領
金峯山寺修験本宗第五代管長

りょうち
五條良知氏



平成29年7月5日、金峯山寺にて

▶ 1300年の歴史を持つ修験道の根本道場

— 金峯山寺の歴史について教えてください。

ここは、修験道の根本道場です。日本中の山伏が一生に一度はここに来て修行をしなければと憧れる山です。私の知る範囲では、東海から山陰までの山伏達は、年に一度は吉野大峯へ来て、修行をしています。

昔から近畿地方一円に居た山伏たちの「講」という組織を中心に、先達に導かれて山上詣でが盛んに行われていました。

その根本道場の一つがこの吉野山と大峯山です。出羽三山や四国の石鎚山、山陰の三徳山、九州の英彦山、北陸の白山など修験道場と呼ばれる聖地は、日本にたくさんあります。

金峯山寺は、1300年前に修験道を開いたといわれる役行者えんのぎょうじゅが、吉野山から24キロ離れた大峯山と呼んでいる山上ヶ岳さんじょうがだけで一千日の修行を行ったの

が始まりです。

役行者が苦行の末に、修験道独特の御本尊である蔵王権現を祈り出したとする修験道の聖地中の聖地が山上ヶ岳なのです。

役行者が、何を思って修行されたのかということ、悪い世の中、例えば親が子どもを殺したり、子どもが親を殺したりという、そんなお釈迦さまの正しい法の無くなった世、末法の世といわれる時代を生きる人々を救ってやりたい、救うほどの仏がほしいということでお祈りし、修行をされたのです。すると一千日目に釈迦如来しゃかにょらい、千手観音せんじゅかんのん、弥勒菩薩みろくぼさつが現れるのですが、3尊は、柔和な優しいお姿なのです。ですから悪い世の中を、肩をいからせて生きているような人々に、そんな優しい姿は見えないかもしれないし、また優しい声が聞こえないかもしれない。

そこで、もっと強そうで悪を打ち払うような仏

がほしいと役行者が修行を続けると、山上ヶ岳の一番上に今も岩がありますが、それが‘ばん’と割れて、中から怒りの表情をあらわにした蔵王権現という御本尊が出てこられたのです。役行者が蔵王権現を感得、祈り出されたと言われております。

▶ 過去・現在・未来を救う蔵王権現

— 蔵王権現は3尊おられるのですね。

権現とは、権（仮り）に現れるという意味で、過去世守護の「釈迦如来」、現世守護の「千手観音」、未来世守護の「弥勒菩薩」の3尊が、仮の姿として過去・現在・未来を救済するために現れたのです。



蔵王堂の秘仏本尊 左から弥勒菩薩・釈迦如来・千手観音

仏教は、現当二世安楽と言って、今生と次の世を心配するのですが、過去のことでも心配したのが日本的で修験道なのです。

この3尊は、怖い表情をしており、末法の世を生きる人々を救うにふさわしいということで役行者が御本尊に迎えられました。

いろいろ説はありますが、山桜の木でそのお姿を彫刻し、お祀りしたのが、山上の蔵王堂、今の大峯山寺本堂です。また女性でもお年寄りでも来られる、麓の吉野山にお祀りして山下蔵王堂を作り、この山上と山下の蔵王を合わせて金峯山寺というお寺が1300年前にできたのです。

— 金峯山寺には国軸山という山号がありますね。

役行者が蔵王権現を祈り出したことで日本の修験道が始まったと言っても過言ではありません。

宇宙の中心という信仰で国軸山という山号があるのだらうと思いますが、役行者が命をかけて祈り出した蔵王権現という御本尊がここにあるので、全国の祈りが集まる軸として国軸山と呼ばれるようになったとも思っています。



金峯山寺の本堂である国宝 蔵王堂

蔵王権現は、日本の中心の大和の国のその真ん中辺りの山上ヶ岳で祈り出された純日本製の仏です。過去、現在、未来の全部を守ってほしいというのが、昔の先人たちの祈りだったのでしょうか。先祖が良くなれば今も良くなるし、子どもたちも良くなるだろうという少し大らかな考え方です。

昔は、子どもが悪いことをしたら「こら悪さをしたらあかん」と近所の大人たちによく叱られました。もちろんお父さんやお母さんも怒った。叱りながら、しっかり地に足を付けて生きていくようにみんなで声をかけていました。

さらに「自分でやりたいこと、できることを一生懸命、頑張ればいい。それが地に足を付けて歩くということだ」と教えられました。それが人としての生きざま、根幹の部分だと思います。真っ直ぐ生きていくには、分不相応なことはしてはいけない。また悪いことをしたら罰が当たる。それよりも自分が今できることを少しでも頑張ろうということです。

私達はこれを精進といいます。まざり気なく前を向いて進むことが大事だということです。

▶ 擬死再生を体験する大峯奥駈修行

— 大峯奥駈道について教えていただけますか。

修行の時期は、大峯山山上ヶ岳が開かれる5月から9月にかけて行われ、現在は、山伏と一般の参加者が一団となって行じる集団修行です。

大峯奥駈修行には昔から順峯と逆峯の二通りの行じ方があります。大峯奥駈道を開いた修験道の開祖役行者が、最初熊野から入り、大峯を縦走して吉野に至ったと言い伝えられていることから、熊野から吉野に向かって行じるのを順峯、吉野から熊野に向かうのを逆峯と言います。

金峯山寺など、吉野山の寺院の奥駈修行は、逆峯修行がほとんどで、吉野山蔵王堂を基点に、熊野へと向かいます。まだ夜も明けぬ午前4時に蔵王堂に整列した奥駈修行一行が、本尊蔵王権現への勤行を捧げ、道中の安全と満行を祈念して、1日目が始まります。まず大峯山山上ヶ岳を目指し、約24キロの行程を11時間かけて歩きます。全行程の踏破距離が約170キロに及ぶ山行は、気力も体力も限界ぎりぎりまで消耗します。

修験道の修行は「擬死再生（一度死んで生まれ変わる）」と言われ、身を以てその死と再生を体験するのが修験道の真骨頂です。道中には、千尋の谷を背に鎖一本で絶壁をよじ登ったり、何か所かは、足場も無いような物凄い岩場を登ったり、本当にどうやってこの道を見つけたのだろうという場所があります。昔の人は、役行者が空を飛んだと言いますが、あながち嘘でもないのかなと思ったりします。

また大峯山中には75の靡とよばれる行所・拝所が点在し、それらの一つ一つに読経し祈りを捧げながら歩きます。拝みたおす行ともいいます。靡とは、役行者の神通力に草木も靡いたとのことから名づけられたともいわれ、修験道に由来する神や仏の居所、峯中の霊蹟や行場を指しています。

▶ 「懺悔、懺悔、六根清浄」の聲がこだまする

— 修行中の山伏達は、「懺悔、懺悔、六根清浄」と声を出して歩くと聞きますが。

「掛け念仏」といいます。基本的には登り坂で声を出します。「懺悔、懺悔、六根清浄」と声を出しながら歩くときつい坂も登れるのです。まあ呼吸法と言いますか、腹から声を出すことで呼吸が乱れません。結構、疲れ方も違います。

奥駈修行がすごいのは、僧侶も普通の人も神道、仏教も全く関係なしに、みんな一緒になって「懺悔、懺悔、六根清浄」と唱えながら歩くところです。

— 宗派は関係なく、一緒に歩かれるのですか。

そうです。明治以降は、神道の人は参加しにくかったようですが、昔から、神様、仏様、みんな別け隔てのないのが修験道なのです。一緒に汗をかいてお経をあげる。一般の人も自分で山を歩いて修行をする。大自然に抱かれて修行ができる、没頭できる、一瞬一瞬に命をかける、ここに大峯奥駈修行のすばらしさがあるのです。また山には規律も信仰もやすらぎも、全部あります。身一つで山に入ると大自然のやすらぎや人の優しさ、温かさを五感で感じるようになります。



— 奥駈修行の一団は、何名くらいで修行されるのですか。

以前は、60人の時もありましたが、今は30人程度です。60人の時は、本当に大変でした。山道の幅は1人分くらいしかないので、そこを60人の隊列で歩くと100メートル前後の長さになるのです。こうなると前の方は何をしているのか見えません。

参加されている方に、もしものことがあったら大変ですから、ずっと緊張状態が続きます。

私達は、修行に参加されている方に一步一步、一瞬一瞬を真剣に歩いてくださいとしか言えません。危ない所に行ったり、滑ったりする人もいます。景色がよかったら眺めようとする。そういう時に気が緩むと落ちてしまいますから、本当に怖いです。30人前後が目届く適切な人数です。

— 今後、奥駈修行に参加される方にお伝えしたいことは何でしょうか。

勝手な行動をされる方もいらっしゃるの山のルール、修行のルールを理解してほしいです。

山に入ると、私達は我を捨ててくださいと言います。我を我慢するのではなく、我を捨てるのです。学歴、経験、現在の仕事の地位や立場、一切関係ありません。山へ入ったらすべてを捨てて歩くのです。そこには先達と行者との関係しかありません。



でも、しんどくなってくると、わがままが出てきます。「もうちょっと早く歩いてくれ」と言い出す人もいます。後ろの方を歩いていると、いらすのです。ペースも違いますから些細なことで、カチンときたりするのですね。ですから最初の夜の集合時に「まずは我を捨てて、あるがままに大自然に全てを任せて、歩かせてもらっていると感じるように努力してください」と注意事項として伝えてあります。修行は命がけですから謙虚でないと歩けません。

— 参加されている方が、最後まで行けるかどうかの判断は、どの辺りでされるのですか。

吉野山から山上ヶ岳まで行くとだいたい分かり

ます。山上ヶ岳まで一緒に着いて来られるなら、心も身体も大丈夫だと思います。24キロを歩ける体力と気力があったら最後まで行けると判断します。それでも山上ヶ岳の夜には「痛いところがないですか。身体は大丈夫ですか。」と一応聞きます。大概是痛いところを隠そうとしますけどね。

我々は、歩いている姿を見ていると大体、分かります。自然に足を引きずったりしますから。足を引きずったり、痛くなったりしていたら山を降りてもらいます。奥駈の道は、山上ヶ岳から天川村の洞川へは、3時間もあれば下れますが、山上ヶ岳から先に進むと、山を降りることはむずかしくなります。弥山を越えて前鬼山ぜんきざんまで連れて行くのが一番なのです。

ですから、山上ヶ岳の夜は、足が痛そうな人に、ここから先の大変さを説明します。それでも「いや大丈夫です。行きます。」と言うと、一緒に行くのですが、弥山までの道中でギブアップされると、その人1人のために2人の世話人を付けて下山するか、2人、3人が数時間遅れで弥山まで連れて行かねばなりません。そのために大勢の人に迷惑がかかるので、辛いでしょうが初日の夜に潔く我々の意見を聞くのも立派な決断だと思います。

それから最近の傾向としてインターネットの影響かも分りませんが、参加される方の人間の質が変わってきたというか、いろんな人が参加されるようになったと感じています。

— 山伏の作法を理解していないのですか。

自分の頭の中で修行というものができあがっているのです。例えば「大先達、ここは1時間半で歩くと書いてありましたが、どうして今年こんなに遅いのですか」と問われます。「遅いとあかんの」と答えると「予定通り1時間30分で進んでもらわないと困ります」と言い返してきます。そんなことにこだわらず懺悔、懺悔、六根清浄を腹から言って、この大自然に抱かれて歩いたらと言うのですけどね。事前に情報収集をした修行というものの確認に来たのでしょうか。これではおも

しろいことも何ともないです。またこういう人達にかぎって事故を起こしたりするのです。

せっかく修行に来たのだから「騙されたと思って大きい声を出して下さい」と我々は言いますが、言うことを聞かない人も多いです。下を向いて黙々と歩いておられます。これではなかなか踏破することもできません。

山伏に連れられて拝み倒して、汗をかいて修行してこそ、またいろいろな話を聞きながら修行してこそ値打ちがあるのです。

▶山伏は一木一草、大自然が全て御本尊

—「講」という組織が少なくなっているというに対してどのように感じておられますか。

まずは山伏の高齢化が原因です。先達が高齢化し、山を登ることができなくなってきたこと。

もう一つはコミュニティ、村社会が弱くなっていることが原因です。以前は、^{かいと}垣内や^{あざ}字単位で皆が集まって奉仕をしたり、掃除をしたり、村祭りを行いました。そんな昔の地域コミュニティの中に、山上詣りの講があったのです。人と人との繋がりが薄らいでいるのではないのでしょうか。また、若い人がそういう組織に入りたがらないのも要因のひとつだと思います。

それでも最近では、修行の募集をすると小グループ、少人数で申し込まれる方が多くなっています。リピーターの方も多く、毎年、定員をオーバーするので、断るのが大変です。

—修行の応募も増えているのですね。

今は世界遺産になる前に比べ、相当増えたと思います。そこからは落ちていないです。拝観者全員が大峯山への奥駈修行に行くかという点とまた別です。やはり修行をしていただきたいですね。山を歩いてもらうのは結構なのですが、修行とは、少し意味合いが違うというのが我々山伏の思いです。

山登りを目的に来られると今晚の宿に着くことがゴールになりますが、奥駈修行というのは、^{そっこんただいま}即今只今の修行で、その一瞬一瞬、一步一步を神

仏に抱かれ、御本尊に守られ、先祖がいるその場所で修行をさせていただくということが目的です。安易に行き着くことばかりを考えていてはだめだということです。大峯の山の中で蔵王権現に抱かれて修行する。山伏は、大自然が御本尊。山に入ると一木一草すべて神仏、木も草も水も風も全部が神さま仏さまの現れと言うぐらいの思いで山に入ります。これが山伏の覚悟です。ですから奥駈修験道の道は、自分で歩かないと分からないです。



また修験道は「実修実験」と書き、実際に自分で行い、^{しるし}験を得る。つまり自身で行い悟りを得るということです。それは難しいことではなく、例えば法事をお坊さん任せにするのではなく、お坊さんと一緒に拝む。ご祈祷するなら自分も祈祷させていただき気持ちになって一緒に座る。一緒に行うことが実修実験なのです。

▶御本尊と相對した8千枚の大護摩供

—管長にご就任されて2年が経つかと思いますが、この2年間を振り返っていかがですか。

管長に就任して2年間は、あっという間に過ぎました。そんな中、昨年11月に行った8千枚の大護摩供は大事業でした。

御本尊と相對したいと思い100日の前行を行い、11月の一昼夜、護摩木を梵焼し続け、役行者が日本中に祈りを散りばめた「万人安樂 とも祈り」を願う行でした。

やろうとしたキッカケは、日本だけでなく世界各地で頻繁に地震が起こる、雨が情け容赦なく降るなどの自然災害とともに人々の心が荒廃していくのが何とかならないか、役行者のようにはできませんが、日本中の祈りを集めたい、そう思ったからです。

私一人では何もできませんが、これからも周りの人たちの協力を得て、時間をかけて「三界の大導師たる僧侶」となれるよう努力し、本宗に関わりのある方々や今後関わりを持たれる方々と蔵王権現の信仰の道、役行者が描かれた道を一緒に歩いていきたいと思っています。



～万人安楽 とも祈り～ 8千枚大護摩供

— 8千枚の大護摩供は捨て身の修行ですね。

護摩木は全部で2万本を超えました。今年の秋に「万人安楽 とも祈り」をもう一度行います。

『とも祈り』とは、それぞれが勝手にお祈りをするのではなく、場所が違って同じ時間に同じことを思いお祈りをしようということです。全国各地のご家庭や職場で、時を同じくしてともに祈り、世界平和の祈りが広がればと思っています。

— 今は、おかげ様でという相手を思う感謝の気持ちが薄いのでしょうか。

我先にという考え方が、どうしてもあります。それをよとした時代もあります。確かに高度経済成長期に経済的に発展し私達の生活も向上したので感謝しなければいけません、でもふと気付くと横に置きざりにしたものが結構あるのではないかと思います。

それは家族や地域の繋がり、すなわち人としての繋がりを横においやってしまったのではと思います。家族そろってご飯を食べる時「いただきます」と言いますね、これも感謝の祈りです。最近ではそれもできない時代になりつつあります。でも失くしてはいけないと思います。皆さんもそう思っているはず。ですからもう一度、みんなで少しずつ戻していければと思います。

▶自然と共にあり、自然に生かされている

— 今の世相に対してのお考えを教えてくださいか。

日本人には、仏様や神様、ご先祖様があり自然があって、全て大事なものです。自分以外のものも全てが大事で、自分以外のものを大事にできるから自分も大事にできるのです。逆に自分を大事にできない人に自分以外の人を大事にすることはできません。そういう意味では、実生活においては人と共にあって、一切を許す。一切を許すが、一切を求めてはいけません。許すことで見返りを求めるのではなく、人と共にあれということです。これを「恕^{じよ}」の心といいます。若い人からお年寄りまでみんながそんな気持ちで通じ合う。そして自然と共にあり自然に生かされている。そういう繋がりを持たれたら良いのではないのでしょうか。

それは前を向いて進むというより、地に足を付けて今できることを一生懸命にする。先ほど精進と言いましたが、ご飯を食べる時には一生懸命食べる、仕事をする時は一生懸命仕事をする。遊ぶ時にも一生懸命遊んだらいい。そういう環境を自分で作っていくことが大切です。でも心が塞がっている時は、なかなかそんな環境を作ることができません。心を広げる方法はたくさんありますが、座禅やお寺で修行するのも一つです。

ただし、修行をするのなら、ちゃんとルールを身につけてもらわないといけませんし、ちゃんとした指導者、つまり先達につかないといけません。今は巡礼が流行っていますが、先ほども言いまし

たように、お寺を見て回るだけでは修行と違います。東大寺さんなら東大寺さんの拝み方、春日大社さんなら春日大社さんの拝み方があるはず。心を込めて手を合わせてそこの神仏と通じ合えないといけません。通じ合ってこそ初めて一千年の先人たちの思いに繋がると思います。繋がりを感知られたら、精進するということが意外に簡単にできるようになると思います。



— 若い人へのメッセージをお願いします。

今の若い人達は、私らの若い時よりもずっと賢い。だから前向きで何でもよく知っているし、できる。でも、ちょっと小難しく、自分本位の人も多いかも。人に興味を持ちもう少し先人たちのことに興味を持っていただくと、人間の厚みがでてくるのではないのでしょうか。

先輩と仕事が終わってから一緒にお酒を飲みに行くのがいいのかどうか分かりませんが、たまに、そのぐらいの余裕があってもいいと思います。余裕がないと、これからの日本にろくでもない物しかできません。余裕をもっていろいろなことに精進できるように、今を頑張れるように、自分を見つけてほしいと思います。たまには山伏修行でもして、先輩に怒られながらお勤めするのもいいのではないのでしょうか。

また、国宝仁王門の大修理勧進として、平成24年より10年間、毎年一定の期間に秘仏本尊の特別

御開帳を行っています。若い人に限らず、ぜひ皆さんに興味を持っていただければと思います。

●プロフィール 五條 良知氏

■主な経歴

1964年、京都府生まれ。1987年、大正大学仏教学部卒業、同年、吉野山東南院奉職。1992年、金峯山寺奉職。2002年、別格本山、大峯山護持院東南院住職。金峯山寺執行長、宗務総長などを歴任。2015年6月、金峯山寺第三十一世管領、金峯山修験本宗第五代管長就任。その他、大峯百日回峯行を修行。全日本仏教青年会理事長、吉野青年会議所理事長などを歴任。公益財団法人奈良県ボーイスカウト振興会理事、等。

■座右の銘、好きな言葉

身ノ苦ニ依ッテ心乱レザレバ証果自ズカラ至ル
御本尊に嫌われるなよ。

■大事にしていること

面倒くさいと言わないこと。大らかに誠実に、御本尊に嫌われぬよう生きるよう、そう精進する。

■趣味

旅（をできればと思っている）

■好きな食べ物

何でも

■私のストレス発散法

眠ること、山並みを見つめ座ること

■奈良県内で一番好きな場所

大峯奥駈道

■金峯山寺の概要

金峯山寺は、修験道の開祖役行者が1300年前に山上ヶ岳に於いて、荒廃していた世の中と人々を救うため、万人救済を祈り、一千日の苦行の末、御本尊金剛蔵王権現を祈りだし、山上（現大峯山寺本堂）と山下（現吉野山金峯山寺）に祭祀したのが開創。以来、修験道の根本道場として信仰を集める。

（聞き手・文責：橋本公秀）